

瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行/カトリック瀬田教会信徒会広報部 東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば 待降節第4主日 C年(2024年12月22日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読:ミカ書 5章1-4a節

第二朗読: ヘブライ人への手紙 10章5-10節 福音朗読: ルカによる福音書 1章39-45節

三つの朗読から

ミカの預言:ベッレへムはダビデ王が生まれた土地、そこはエフライム(エフラタ)族という 小氏族が住む土地でもありました。少数派の中から「イスラエルを治める者が出る」と第一朗読は伝えます。彼は「主の御名の威厳をもって」群れを養い、群れは「安らかに住まう」。彼の「出堂は古く、永遠の昔にさかのぼる」のです。神さまは永遠の昔から救いのご意思、計画の中で、エフライムから救い主が生まれることを決めていました。この救い主は、力の均衡でもなく、人間の力によるのでもない、神の力に身を萎ねて主の力、神である主の御名が働くことで生まれる「平和」をもたらすのです。

ヘブライ人への手紙:「世に来られた」キリストは、「焼き尽くす蔵げ物や罪を贖うためのいけにえを好まれ」ませんでした。キリストが来られたのは、神の「御心を行うため」だったのです。神の御心は「律法に従って献げられるものを望みもせず、好ま」なかったことでした。そこで、御心を立てるためにキリストは、自分自身を献げたのです。こうして「わたしたちは聖なる者とされた」のです。

ルカによる福音書:エリザベトは聖霊が今、自分に働いていることを自覚していたのでしょうか? 「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました」。エリザベトは何か不思議な力が自分の身体に働いていることには気がついていたでしょう。でもそれが神の霊、聖霊であったかどうかは気づかなかったかもしれません。それでも、彼女は悟ります。マリアが「わたしの主のお母さま」になったことを。これもまた、エリザベトに働いた聖霊のおかげです。胎内の子が「喜びおどった」ことで、さらにマリアは悟り、理解します。救いの歴史の中で語られた神のことばが、実現したことを。

福音朗読の背景を考えてみましょう。洗礼者ヨハネの誕生が告知され(1章5節~25節)、イエスの誕生が告げられ(26~38節)た後で、エリザベトとマリアの出会い、そして胎内にいる子ども同士の出会いが語られるのが今日の福音朗読の箇所です。これまでヨハネとイエスが 別個に語られてきたのに、ここで二つの物語は合流し、それから、ヨハネの誕生(57~80節)、イエスの誕生(2章1節~21節)へと展開していきます。ですので、今日の朗読箇所は、ヨハネとイエスの物語を結びつける役目を果たしています。

39 節にある「向かった」(フランシスコ会訳)と、56 節にある「帰った」(同)で大きな枠組みをつくりあげています。このなかで前半はマリアのエリザベト訪問とマリアへのエリザベトの祝福が述べられ(39 -45 節)、後半ではマリアの賛美の歌(46 -55 節)が記されています。福音朗読にあるエリザベトの祝福の言葉(42-45 節)は、マリアの神への賛美と対応します。というのも、両者は「喜び」(44、47 節)、「幸い」(45、48 節)が共通する言葉としてあるからです。

【ちょっとひと言】

以下、がんこなじじいのひと言だと思って聞き流してください。でもたいせつなことです。

少し気になるのは、「クリスマスイブ」という表現です。「クリスマスイブ」とはクリスマスの前夜ということで12月24日の晩を指しているようです。ですから、24日の夜のミサを「クリスマスイブのミサ」、あるいは「イブのミサ」と呼ぶ信者さんがずいぶんと増えました。神父でもそう呼んでいる方がおられるようです。

24日の晩のミサは、25日の夜半のミサのことです。深夜にミサをできなくなりましたから 「竹倒しでミサをしているのであって、「イブのミサ」ではありません。そもそもカトリック教会には 「クリスマスイブ」という概念がありませんからご注意ください。典礼の時間は日没後から翌日と なります。ですので、24日の夜のミサであってもそれは25日の夜半のミサなのです。

お知らせ

小さなパイプオルガンを三週間ほどお借りしました。音の具合などをお楽しみください。 近い将来、現在使われているオルガンは寿命を迎えます(50年以上使いました)。

新しいものを購入する際の選択肢のなかに、この小さなパイプオルガンも含めていただけ たらありがたいです。